

# 速報

## 台湾の12年度最終アユ放流に立会って

2012年3月3日～5日迄、Taiwan JFT(前、台湾流友会)の 汪 慶堂会長の招きにより、12年度最終のアユ放流事業に立会う事が出来 村上理事長以下3名で訪台し、台湾のアユ放流をつぶさに見て来ました。場所は、坪林 北勢溪の上流部でした。

30年にも及ぶ長き道のりを経て、台湾の北勢溪に日本のアユの復活を見届けて 故 佐古田理事長、顧問の鈴木先生、村上理事長達の長い活動と、台湾流友会との付き合いの結果が、この快挙を生みました。

今、台湾では友釣り人口が800とも1200とも言われる程に、アユの友釣りが盛んになっています。本年(12年度)の 6月の全日本アユトーナメントには、台湾より2名の選手が参加し、シード選手 FT選抜選手に挑んできます。楽しい試合を期待しております。

昨年度迄は、海外友好団体として接してきましたが、本年より Taiwan JFTとして、本格的に活動を開始し、4月のグレ王座、歴代チャンピオン懇親大会にも、3名の見学者の来日が在ります。登録会員数も 43名となり、今後会員数の増加が見込まれます。

注 顧問の鈴木先生は 台湾省水産試験所長の後 中央研究院 院士

### 台湾のアユの経緯

台湾ではアユは、「香魚」と呼ばれている。 日本の一部地域と同じです。

台湾では、戦後の森林伐採、砂利採取、電気、薬品を使った乱獲、河口汚濁等により、アユ資源は激減した。1960年前半以降の事である。

1977、78年に 琵琶湖の小アユを三万尾づつ輸入し、北部の4河川に放流したが遡上の確認なし。1981年春、空輸された2万5千尾の稚魚が、台北県の南勢溪に放流 同年秋に発眼卵200万粒が台北県にある試験池で5万匹の稚魚となり、82年春に南勢溪に放流された。

因みに、81年の放流、発眼卵の寄贈は、故佐古田理事長の依頼をうけ、“がまかつ”の提供。82年夏、全日本釣り技術振興評議会のアユの名手たち十数名が訪台し、友釣りに挑んだが釣果は1匹のみであった。

この折同行していた顧問の鈴木先生に、台湾より協力を求められて以後、技術的指導を行っている。その頃、JFT佐古田理事長と交流があった台湾流友会 汪 慶堂会長より放流事業の推進を求められ、和歌山県日置川漁協の下 譲三組合長(当時)へ 佐古田理事長が依頼し、発眼卵の供給を受け、82年、83年、84年と全日本釣り技術振興評議会より提供を行った。

最後の84年には、台湾の税関にて足止めされそうになって、夜間に台北市長の自宅を訪ね、張市長に引受先となって頂き、無事に死滅させずに 北勢溪の流れに発眼卵 200万粒を納めた木枠を沈め、自然孵化を試み 台湾流友会のメンバーがすぐ横にテントを張り、交代で昼夜その番をしてくれました。1984年12月のことである。

その結果、86年春 北勢溪にアユの遡上しているのが確認され、台湾のアユの復活の第一歩となったが、然し未だ海からの遡上はの確認の報告はない。

このダム上流への放流は、鹿児島県の池田湖や宮崎県の御池での移植、定着例がヒントとなった。

## 台湾アユのDNAは？

全日本釣り技術振興評議会 顧問の鈴木先生の元に、台湾魚類遺伝子解析の専門家より、10年前に日置川産のアユを依頼され、空港で手渡し<sup>が</sup> その背景には、台湾の山間部で在来アユが発見された頃と同時だった。然しその解析結果は未だ公的にも、私的にも伝えられていない。  
鈴木顧問の推測では、在来のアユは、日置川起源だったのでは？。

2012年3月

特定非営利活動法人

全日本釣り技術振興評議会

事務局

※ ここに記載の資料は、鈴木先生の文献より引用をさせていただきました。

### 参考資料

#### 放流量状況

各界釣友	亀山橋	約	3.5万匹	
	直漂	約	3.9万匹	
	大甲溪	約	12.6万匹	
	内灣	約	6.6万匹	
追星鮎友會	坪林 北勢溪	約	13.0万匹	
	基隆河	約	10.0万匹	
	坪林歹魚堀溪	約	3.0万匹	
坪林郷公所	坪林歹魚堀溪	約	12.8万匹	
扶輪社	坪林 北勢溪主流	約	11.0万匹	
民間慈善団体	坪林 北勢溪主流	約	15.0万匹	合計 91.4万匹

※ 上記の結果から、放流団体は各自にて放流資金を募金し放流事業を行っており、日本とは異なるもの。

Tiwan JFT は下記団体が所属しています。

台湾流友會  
台湾追星鮎友會  
新北市釣芸協会  
台湾清流會  
恆澧公司  
台湾鬪鮎會

以上 会員登録 43名です。

※ 訪台の折には、多くの皆様にお世話を頂き心よりお礼を申し上げます。

謝謝！！